

【実践報告】

学校全体でコミュニケーション力を高める

——ピア・サポート・プログラムの実践

富山県上市町立白萩西部小学校校長

ししどみまきこ
穴戸美喜子

コミュニケーション力を育てるとする場合、つい聞く力や話す力にのみ注目しがちである。しかし本来コミュニケーション力とは、他者と積極的にかかわろうとする意欲や態度を含めた幅広い力、いわば社会性の中核をなすものと捉えていくべきものであろう。

富山県上市町では、一つの中学校と六つの小学校が一枚岩となり、次にあげるような項目（全十項目、他略）を共通に掲げ、広い意味でのコミュニケーション力の育成を進めている。

- 一、自ら学び自ら考える力の育成
- 一、いのちと人権を大切にす教育の徹底

プログラムの導入

上市町が「ピア・サポート・プログラム」の導入を開始したのは、平成十一年度である。六つの小学校の卒業生は、全員が一つの中学校へ進学する。だから、すべての小学校がこのプログラムに取り組むことにより、中学校では同じ素地をもった子どもたちが、より広がりのある「ピア・サポート・プログラム」に取り組むことができる。町ぐるみで意図的・計画的に取り組むことで、九年間を見通して子どもたちの社会性やコミュニケーション力を育てようという実践なのである。

本格的に取り組みがスタートした平成十二年度には、六年生の担任のほかに保護者にも呼びかけ、「ピア・サポート・プログラム」の「領域1」のトレーニングを体験できる場を設けた。地域や家庭にもこの取り組みについて理解していただくことが大切と考えたからである。また、十三年度からは、町の全教員が取り組めるよう、定期的に研修会が行われてきた。

お世話活動の前に——「領域1」の実施

六年生に「ピア・サポート・プログラム」の「領域

一、豊かな心を育てる道徳教育の充実

一、自己指導力を育てる生徒指導の充実

こうした目標をより一層具現化するために、上市町では「日本のピア・サポート・プログラム」に取り組んでいる。これは、国立教育政策研究所と「横浜ピア・サポート研究会（ピア・サポート・ジャパン）」が開発したもので、「お世話をする活動」を通して「自己有用感」を獲得する「領域2」と、その準備段階のトレーニングに当たる「領域1」の二つから成り立っており、学校全体で取り組む点に特徴がある。上市町では、それをさらに町全体で取り組んでいるのである。

1」のトレーニングを実施する際、私たちが意識したことは、

- ・ 子どもに教え込んだり、気づかせようとしたりする必要はない
- ・ ふりかえりの場を大切にし、時間を十分確保するということであった。トレーニングだけで子どもたちを変えようとするのではなく、あくまで「領域2」の準備という共通理解のもとにスタートしたわけである。

毎日一緒に過ごしていても、友だちのことをよく知らなかったり、「あの人はこんな人」という思い込みで接したりすることが多いため、「自分のことをわかってくれない」という気持ちをもつ子どもは意外に多い。そんな子どもたちが、五年生の三学期に「ピア・サポート・プログラム」の「領域1」のトレーニングを体験した。子どもたちには、回を重ねるごとに和やかな雰囲気が見られるようになった。ふりかえりカードの中には、今まで意識していなかった相手の気持ちや自分の感じ方を発見して「うれしい」と書く子どもも増えてきた。

2つ「お世話活動」へ——「領域2」の実施

六年生になり、実際に一年生とのかかわりがスタート。

児童数五九名と小規模校であるわが校では、集団登校や給食、掃除など、学校生活におけるほとんどの活動が縦割りで行われている。従来から「お世話活動」を行ってはいが、「六年生だからやらなくてはいけない」と感じていただけの子どもが多かったように思う。

しかし、「領域1」のトレーニングを受けて「どんなお世話ができるかな」と一年生の入学を楽しみにしていた六年生には、新学期も、これまでの六年生とは異なる、期待感にあふれたものであったに違いない。

そんな中で、「一年生となかよくなるう」と名づけた一連の「領域2」の活動が始まる。計画を自分たちで立て、一年生と六年生のペアを決めて活動する。「計画―実践―ふりかえり」の一連の流れを子どもたち自身で行えるよう、「総合的な学習の時間」に位置づけている。六年生が確実に「自己有用感」を獲得できるようにするためである。以下、今年度の六年生の取り組みを紹介する。

「お世話活動」の期待の中

(1) 四月「入学おめでとう！ なかよくなるうね集会」
「お世話活動」の一回目は、一年生の入学を祝う集会であった。六年生は一年生に楽しんでもらえるようにと

児童会とも協力しながら計画を立てた。

集会の中では、ペアになった一年生を六年生が紹介するコーナーが設けられた。そのため、六年生は一年生の名前を覚える、得意なことや特徴を知る、等の必要が出てきた。登校時や休み時間などを利用して一年生に質問したり、自分も自己紹介したりする姿が見られ、ある程度、なかよくなることのできたようである。

ただ、なかには友だちと一緒に一年生の教室へ顔を出し、必要最低限のことを聞くだけで精一杯という六年生もいた。集会後のふりかえりからは、

・一年生が楽しんでくれてよかった。(S児)
・紹介するとき、つつかえそうできぎきした。(E子)

紹介する内容をちゃんと覚えていたからよかった。

(J子)
と、緊張した気持ちや役目を終えた安堵の気持ちを語る言葉が多かった。

(2) 五月下旬「裏山探検」

わが校のすぐ後ろにある『裏山』は、子どもたちにとって絶好の遊び場である。「お世話活動」の二回目は、そこへ一年生を招待し、一緒に遊ぶ計画を立てた。

活動としては、「基地づくり」を計画するグループが多かった。材料や方法など相談しながら、事前に下調べをしに行くグループもあった。一年生にはどんなことができそうか、どの場所だったら安全なのか。一年生の先生にも尋ねながら計画を進め、また準備や手順などを知らせ、当日を迎えた。

グループによっては場所を変更せざるを得なかったり、思ったより一年生が動き回るので目が離せなかったりと、予想外の出来事に苦労したようである。ふりかえりでは、

・いろいろ準備して計画したけれど、はじめ、一年生がそのとおりに動いてくれなかった。予定を変更して活動場所を変えることになったけど、そうしたらみんなが動いたのでよかった。(S児)

・一年生が三人いたので、三つプランを作った。高くて乗りにくそうだった子は抱っこしてあげた。みんなが楽しんで乗ってくれたので、作ってよかったなと思った。(E児)

と、自分たちの計画した遊びを一年生は喜んでくれているのかな、と気にする様子があがえた。また、このころになると一年生も随分学校生活に慣れ、よく質問したり思ったことを声に出したりするようになってきていた

ので、わがままに受け取れる言動にどう対処したらよいのかとまどう六年生もいた。

(3) 七月「プールで遊ぼう」

計画の様子を見ると、前回のふりかえりをもとに、どうしたら一年生の「お世話」ができるのかを真剣に考える様子が見られるようになった。個人差はあるが、進んで一年生と接している姿や「一年生はどう思うかな」と、相手の立場に立って考えようとしている姿も見られるようになってきた。

「お世話活動」だから仕方なくする、というのではなく、相手を思いやったり、なかよくなりたいという気持ちで自然にかかわり合ったりする様子も見られるようになり、かかわり方に「広がり」と深まり」が感じられるようになった。

しかし、なかには一年生や他の学年とかわかることを苦手に思う子どももいる。また、自分が出て行くタイミングがわからない子どもや、自分の思いが強くて相手を立てることを無意識のうちに拒む子どももいる。「プールで遊ぼう」では二年生・五年生も参加して一緒に行うことから、より多くの学年の子どもたちとかわらなくなっていく。これから大人になっていく六年生がコミ

ユニケーション力を身につけ、確実に「自己有用感」を獲得できるように、彼らの活動を支援していきたいと思う。

自信をもつて

もうすぐ一学期が終わろうとしている。今学期のかかり全体を通してみると、次のような場面が心に残る。

○六年生のS児—一年のK児

ペアを組んでいるわけではないが、友だち同士を通じてなかよしになった。みんなで遊んでいるときふざけすぎたK児に対し、S児は手を取りながら「○○はだめだよ。どうしてだめだかわかる？」と低い姿勢になって注意をしていた。無意識のうちに相手の目線におりている様子がほほえましく感じられる。

○六年生のE子—一年のM子

E子は、手のかかるM子に対して、いろいろなことをわかってもらえるよう作戦を練りながらかわってきた。あるときM子はE子に、「E子ちゃんが一年生のとき、誰が六年生だったの？」と質問。答えてもらったあと、今度は「私が六年生になったら、誰が一年生？」と聞いていた。六年生とのかかわりを心地よく感じているようである。

強制しないようにしている。(一子)

また、一年生と接するときどんな点がむずかしいと思うかを尋ねたところ、次のように答えている。

・高学年ならわかる言葉も、一年生に言ったらぜんぜんわかってもらえなかったことがある。私たちが当たり前に使っていた言葉も一年生には伝わりにくいんだなあと思った。だから、一年生に話すときは簡単な言葉に直したり、話す前にどんなふうに話すかを考えておいたりしておく方がいいかなと思った。(一子)

・私のペアの子は、何を聞いても「うん」と答えるので、本当の気持ちかどうかわからないことがある。また、何でも質問してくる一年生もいて困ることがあるけど、そういう子はきつと不安なことがあるのだと思う。(一子)

一年生といっしょに活動したり、何かを教えてあげたりすることは、思ったよりもむずかしいことであったようだ。しかし、自分ができること・してあげたらよいと思うことを考えて行動していくうちに、相手が自分に望むことを意識できるようになっていったように思う。

お世話活動というと、何となく六年生がまんして一

六年生の感想から

このように、さまざまな場面で一年生とともに活動してきた六年生は、今、どんなことを思っているのだろうか？ 一年生と接してきて自分のよくなったと思う点について聞いてみると、次のような答えが返ってきた。

・相手に対してやさしく話せるようになったこと。怖い人だと思われないようにということを意識するようになった。(〇児)

・ペアの一年生と話をするとき、相手にわかるように言うことができるようになったと思う。また、ペア以外の一年生ともなかよくなれたので、多分、接し方が上手になったのだと思う。(〇児)

・一年生と活動するようになって、低学年に対する言葉づかいがよくなったと思う。それから、何でも人に聞いたり答えたりしなければいけないことが多くなったおかげで、私自身、自分からいろいろ聞くようになるようになった。(一子)

・だいたい一年生が何を思っているのかが、わかるようになってきた。それから、相手が何をしたいのかを考えるようになった。いやだろうなと思うことは、

年生に合わせるという様子を思い浮かべがちであったが、実は、お世話することを通して、細やかに、そして真剣に人と接することができる力を育むことができるようになってきたのではないかと思う。

「日本のピア・サポート・プログラム」では、他者とのかわりあいの中で自分の存在を感じることを、「自己有用感」と呼ぶ。それを自分自身の実感として意識できたとき、相手の声と同様、自分の心の声にも耳を傾けられる六年生になれるのではないだろうか。

参考文献

- (1) 滝元 (編著) 『ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編』金子書房、二〇〇一
- (2) 滝元 (編著) 『ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編』金子書房、二〇〇二
- (3) 田中涼一 『ピア・サポート——お世話活動を通じた子どもの社会性発達支援』『児童心理』二〇〇二年八月号臨時増刊、金子書房
- (4) 松田満理子 「話を聞かせる授業づくり ピア・サポートの実践から——友だちの話を聞く」『児童心理』二〇〇二年二月号、金子書房